



三 お楽しみのバージョン

「あのね、わたしね、失礼かも、嫌味な言い方かもしれないけれど、左ハンドルの車しか運転したことがないの」

次に画面に出てきたのは、「お楽しみ」のテロップと化粧の仮面を被った、舌足らずの若い女性。

十分嫌味ですよ。お嬢さん。ヤクザの次は、キャバクラ嬢か。俺だって草野球をする時は、グローブは左にはめるぜ。ほかに左と言えば、頭のとんこつの巻き方が左巻きだ。また、考え方も政治的にも左指向っていつも友達にいわれるね。ほっといてくれ。俺は変わっているんだ。人と変わっているから、俺なんだ。人と全く同じならば、単なるコピー人間になってしまう。俺みたいになりたいんだったら、いつでもあんたの鼻を押してやるよ。そうすれば、マンガのパーマンじゃないけれど、すぐに俺のコピーになれるよ。何、あんたみたいな変な人にはなりたくない？変な人とは、俺への賛辞なんだよ。常に変する、変わり続けることが、俺の生き方なんだ。

「それでね、空港も成田しか知らないの。あら、最近では羽田からも海外に行けるの？知らなかったわ。じゃあ、今度からは羽田を使ってもいいわ。羽田って、成田と同じつくりなの？同じ田がつくから、昔は、田んぼだったのかしら。田んぼの幼虫が成虫となって、羽田から成田まで飛んでいき、虫の飛行場から、ジェット機の空港に成長したのかしら。そう言えば、飛行機も羽が生えているわね。虫と飛行機って、兄弟か、親子の関係なのかしら。血は繋がっていないけれど、大空を飛ぶシステムの知は受け継がれているはずね」

残念だけど、羽田と成田の間に航空路はないよ。そりゃあ、突然、飛行機が事故か何かで着陸しなきゃならなくなって、成田から羽田、羽田から成田に降りることはあるかもしれないけれど。俺は、航空関係者じゃないから、詳しいことはわからない。過去にも、例があるかもしれないな。まあ、それはそれで無事、着陸できればちょっとした遊覧飛行かも知れないね。それに、虫と飛行機が、兄弟か親子だなんて、どこからくる発想なんだ。人類は、鳥のように大空を飛んでみたいという願望から、飛行機を発明したのだから、虫と飛行機が知でつながっているという物の見方はいいね。相手が、キャバクラ嬢だとなめてかかっちゃいけないな。自戒。

だが、俺は、鳥に憧れたことはあっても、虫に、夏に清らかな血を吸いにくる蚊に、憧れたことはないな。折角の夢心地の最中、聞こえるか聞こえないかの羽音をたてて、忍び寄る吸血鬼。顔に止まったぞ。それ、と右手ではたく。顔には手形、指形がつき、赤く腫れあがるものの、肝心の獲物の姿はどこにも見えない。眠い目をこすりながら、ベッドから起き上がり、ぺっしゅんこになっているはずの標本材料を探すがみつからない。

ふと、左足がかゆく感じる。赤く膨れ上がった水疱。やられた。敵の誘導作戦にまんまと引っ掛かってしまった。昨晚も同じだった。右足の親指の付けが膨れている。ひよっとしたら、仲間の蚊がいて、一匹の蚊が獲物を引きつけている間に、もう一匹の蚊が足を刺す囮作戦を実行しているのだろうか。だからと言って、憎い蚊と同じような羽を背中につけて、ブーンと部屋の中を飛び回り、ハエのように手を叩きながら、蚊を追い回したいとは思わない。

話がずれた。彼女が成田しか空港を知らないと言うことは、海外旅行しかしたことがないと言うことが言いたいのか。それとも、成田空港内のコンビニでアルバイトをしていて、従業員専用通行券を紛失してしまい、何年間も外へ一歩も出られず、そのまま空港生活者になったのか。前者なら、十分嫌味だ。

また、また、話は変わるが、俺は、大江戸線の地下から地上に抜けるのに、走り上がったことがある。エスカレーターに乗ったままの一日の疲れを抱えた会社員や塾帰りの子供たちを尻目に、ポン、ポン、ポンと二段飛ばしで階段を駆け上がる。人間って、不思議なことに、急に、たわいもないことに一生懸命になってしまう。周りの者が拍手してくれるわけでもないし、憧れの君に自分のカッコいい姿を見せようっていうことでもないのにね。何なんだろう。この湧き上がってくる熱い激情は。自分で自分を抑えきれないし、いや、返って、もう一人の自分が自分を鼓舞している。そうなりゃあ、誰だって、頑張らないわけにはいかないよ。自分への応援団が自分なんだから。

でも、それが反対に、大きな落とし穴となることもある。言っておくが、階段や通路の一部が剥がれて、小さなひっかかりができ、それに躓くことではない。翌日、足がパンパンに膨れ上がることだ。ヘタをすれば、ベッドから起き上がれないくらいの筋肉痛だ。もう一人の俺が俺を応援して、もう一人の俺の体が俺を動かなくさせている。実に、不思議な現象だ。俺が俺に弄ばれている。まあ、俺のことはいい。成田に話を戻さない。

えーと、成田と羽田の田んぼの話だったな。田んぼがどうした。それじゃあ、三田は田んぼが三枚あったというのかい。うん、そうだったかも知れないな。でも、田んぼが三枚とは少ないな。それとも、数の数え方で、一、二の次が、たくさんを意味する三であれば、話がわかる。つまり、三田は、開墾された田んぼが広がっていたと言うことだ。それ、本当か？他に、田が付く名前の地名は、田園調布だ。これは・・・。

「それでね、必ず、旅行の時の送り迎えは、店のお客さんをお願いしているの。いつも、いつも頼める訳がないし、そんな客なんかいないと疑っているのね。それが、大丈夫なの。私のお客さんだけじゃないわ。海外旅行に行く友達四人のうちの誰かのお客さんをつまえばいいの。でも、お客さんとの関係はそれだけよ。ただ、送り迎えしてもらっただけ。手だって握りはしないわ。「ありがとう」の言葉と微笑みだけで、みんな、満足してくれるの。みんな、やさしい言葉に飢

えているのかしら、それとも、誰かにやさしくすることを欲しているのかしら。どちらだっていいわ。あたしたちは、あたしたちの初期の目的を達成すればそれで充分よ。後は、お客さんたちが自分に都合のいい理由を考えてくれれば、それでいいのだから。

あら、ごめんなさい。あなたは別に心配しなくてもいいのよ。あなたに、今度の海外旅行に送ってくれなんて頼まないわ。来週、カリブに行くのよ。いいでしょう！念のために、日程と時間を教えるわ。送迎用の車は右ハンドルでもいいわよ。あなた、サラリーマンでしょう？お給料だって安いでしょう？車を持っていなければ、無理して、この日のために、車を買わなくてもいいわよ。当日は、レンタカーでいいわ。

でも、軽自動車はやめてね。だって、四人乗りでしょう。運転するあなたが乗れなくなっちゃうじゃないの。まさか、後ろから車を押していくわけにもいかないでしょう。それに、軽自動車なら荷物だってあまり積み込めないでしょう？。だからと言って、二トン車のトラックはやめてよ。これでも、あたしたちはお客さんなんだから。後ろの荷台で、田舎のお祭りのように、鉦や太鼓でも叩いて、獅子舞でもしろというの。でも、踊りだったら自信があるわ。これでも、プロのダンサーを目指して、アメリカに留学したことがあるんだから。たった一か月だけど。それでも、自分の経歴には箔がついたと思うわ。

あーあ、カリブ旅行が楽しみだわ。さっそく、荷物を積み込まないと。ディナーに出るための服だけでスーツケースが一杯になっちゃうのよ。ほんと、大変。何回も言うけれど、できれば、できるだけ、トランクの広い車をお願いするわ。繰り返すようだけど、スーツケースだって、大きいんだから。それに数だって、一人当たり、二個から三個は必要なのよ。一か月の長旅よ。本当に、あなた一人で大丈夫かしら。心配だから、誰か、友だちを連れてきてもいいわよ。今回だけは許してあげる。鏡モチ運びの選手権のチャンピオンなら最適ね。そう言う人、あなたの友だちにいるの？」

おいおい、俺だけでは、不足なのか。不満なのか。それに、楽しいのは俺じゃなくて、相手の方じゃないか。俺は全然楽しくないぞ。とにかく、全く、話が噛み合わない。会話というより、話の一方通行だ。ジェット機も車も一方通行だ。行ったきりだ。二度と帰ってきそうにない。仕方がない。バージョン変更だ。

「ちょっとまってよ。まだ、話が終っていないわ。それでも切っちゃうの。残念ね。また、指名してね。今度は、私が、カリブから帰ってからだから、あと一ヶ月後よ。忘れないでね。それまで、寂しいかも知れないけど、我慢してね。帰国日にあなたが迎えに来るのを待っているわ。今日は指名してくれて、本当にありがとう」

「お楽しみバージョン」の画面が消えた。

